

## 《論文》

**学芸員課程と情報発信：Twitterの試み**

松友知香子

## はじめに

近年、北海道の博物館施設では、海外からの観光客を念頭においたインバウンド対策を充実させており、博物館における日本文化の体験や多言語表示等が整備されていたが<sup>1</sup>、2020年、新型コロナウイルスの感染者数の拡大を受けて、世界中の人々の往来は大きく制限されることとなり、博物館施設においても急遽、新型コロナウイルス感染症対策がとられるようになった。本研究においても、この影響は不可避で、研究申請当初は博物館施設のインバウンド対策を調査する予定であったが、日常生活が大幅に制限される状況から、筆者の関心は次第に、博物館類似施設である本学の埋蔵文化財展示室を活動拠点とする学芸員課程<sup>2</sup>から、留学生を含む学生及び博物館関係者、近隣住民に対する情報発信へと移っていった<sup>3</sup>。したがって本論では、学芸員課程の情報発信を取り上げ、コロナ禍の今、ソーシャル・ネットワーク・サービスの導入を検討し、その効果や今後の改善策について考察したい。

**1. 新型コロナウイルス感染症の影響：入館者数の変化から**

学芸員資格課程は本学に1997年に設置され、その活動拠点の一つは、埋蔵文化財展示室である。展示室では、主に春学期は収蔵庫の資料を中心とする常設展、秋学期は学芸員資格科目の博物館実習を受講する学生による企画展が催されている。1年を通して開館しており、本学の学生や教職員を対象とするだけでなく、これまでオープンキャンパスなどの際には、高校生やその保護者を対象とする見学会を開催したり、近隣の西岡北小学校の生徒を招

いた考古学系のワークショップなども開催してきた。しかしながら2020年度は、新型コロナウイルスの影響で、大学関係者以外の学内立ち入りが禁止されたこともあり、展示室も10月まで閉館されることになった。このような特別な事情を踏まえつつ、コロナ禍による展示室入館者数への影響を浮かび上がらせたい。具体的には、例年、秋学期の1月末から翌年度の4月中旬にかけて毎年開催している上述の学生企画展の入館者数を取り上げる。過去の例として、2014年度の企画展「彷徨する学者（ワンダリング・スカラー）と歩く世界—山口昌男が愛したアーティストたち—」（開催期間：2015年1月24日～4月28日）、2016年度の企画展「受け継がれる技と想い～本田教授アイヌコレクションを中心に～」(2017年1月21日～4月14日)を選出し、2020年度の企画展「# with 感染症～ペスト・天然痘・スペイン風邪・コロナ～」(2021年2月8日～4月16日)と比較する<sup>4</sup>。

この三企画展の入館者数は、2014年度はおよそ480人、2016年度は181人、2020年度は156人であった<sup>5</sup>。新型コロナウイルスの影響を考えた際、2016年度と2020年度は、あまり差がないように思われるが、2020年度の入館者数を支えたのは、2021年3月13日(土)に開催されたオープンキャンパスに依るところが大きく、ミニキャンパスツアーのルートの一部に組み込んでいただいたので、短時間ではあったが、高校生とその保護者(合計63人)にご鑑賞いただいた。この入館者数63人を差し引くと、2020年度はおよそ90名の入館者数となり、学生企画展としては、おそらく開催以来、初めて100人を割る入館者数になっただろう。2020年度は、コロナ禍による外出制約や、近隣の方々、児童や生徒の入館者数が減るのはやむを得ないのだが、筆者としては、遠隔授業の影響はあるものの、特に大学生と大学職員の来場数が減少しているように感じる。特に2014年から2016年の入館者数の減少を考えると、これは学内での展覧会ではあるが、一部の関係者しか知らない、あるいは展覧会に来場する動機が極めて薄いという可能性も考えられる。そこで次に、展覧会の周知に関して、これまでの広報活動を振り返ってみたい。

この展覧会は、学生企画展であるので、広報活動も学生主導で行わせてき

た。大学 HP での紹介のほか、大学内では、図書館および本学本館の1階エントランスや公民館及び地区センター、学生のアルバイト先などにポスターを配布、設置し、教職員に対しては、レターケースへポスターを投函するなどしている。構内のポスターは来学しなければ目に触れないため、前年度よりも展覧会の周知が難しく、また従来展覧会では、実習室での教育活動に連動して来場する学生が多く、例えば4月の入門演習の際に、教職員に履修生を引率いただいたり、1年生を対象とした考古学系のワークショップが行われていたため、4月の来場者の増加につながっていた。2021年の4月は、一部は対面授業が行われており、学生の入館者数を伸ばすチャンスはあったのだが、積極的な活動はできなかった。

減少した入館者数を、以前の水準まで戻すには、しばらく時間が必要になるであろうが、他方で学生企画展は毎年開催されており、時間的、物理的な制約のない方法で、特に大学関係者のリピーターを増やし、さらに学外の新規来場者を増やしたいと考えている。そして学芸員課程における学びの成果や社会教育的な効果を容易く伝えられるような方法を導入したいと思案していると、2020年度の企画展の反省会の場で、博物館実習履修生から SNS による情報発信、例えば実習での企画展や、館園実習という博物館施設での1～2週間の実習の感想や学びについて、許される範囲内の情報発信を積極的に行うのはどうか、という提案を受けた（詳細については、次章で述べる）。

学芸員課程についての SNS の研究とは少し異なるのだが、博物館施設における SNS 活用の効果については、近年研究調査が進められているので、ここで概略を紹介すると、井上透氏の研究「ミュージアムのインターネット/SNSに関する取り組み」<sup>6</sup>がある。この研究によれば、調査対象とする1103館のうち、25.6%がSNSを実施しており、特に館種別に見ると、動物園や水族館など、集客力のある博物館ではおよそ55～60%の実施率で、ユーザー（来場者）とのコミュニケーションを重視していることが窺えるという。他方で歴史系や郷土系の実施率は、平均以下の数値であるという。また「SNS実施館は、未実施館と比較して、平均入館者数が、(略)植物

園 2.9 倍、美術 2.5 倍、動物園 2.4 倍、歴史 1.8 倍、水族館が 1.7 倍、郷土 1.7 倍」であり、「全ての館種において SNS の博物館への導入は、入館者数増加の要因になっている可能性がある」という。以上のように、博物館の集客においては SNS は好影響と認められるため、学芸員課程における SNS 活用についても、ある一定の効果が期待できると判断し、学生からの提案を具体的に検討することにした。

## 2. 学芸員課程の Twitter 運営の検討と実践

2020 年度は、秋学期の途中から再び遠隔授業となったため、初めてのオンライン形式による企画展の準備となった<sup>7</sup>。筆者から見ると、オンライン授業自体は、春学期にも経験していたので、授業形式による学生への影響は少ないように思われたが、それでも新型コロナウイルス感染症が学生に与えた衝撃は深く、展覧会テーマの議論にもしばしば取り上げられ、最終的に企画展のテーマ「# with 感染症～ベスト・天然痘・スペイン風邪・コロナ～」となった(図 1)。

展覧会のための調査や設営(パネル・キャプション等の制作や展示作業)に関しては、密を避けるために、各グループが時間帯をずらして作業したこともあり、会場全体を俯瞰して修正する作業には、対面授業とは違う工夫を要した。学生たちは Line などの身近なアプリを大いに活用して、変更点をフォローし合い、この作業を乗り切ったのだが、その後の反省会では、コロナ禍での展覧会への影響を心配して、SNS を活用した展覧会の宣伝や埋蔵文化財展示室の紹介を行えないかという提案があった<sup>8</sup>。その目的として、以下の 6 点を挙げてくれた。(1) 埋蔵文化財展示室の収蔵品の紹介、(2) 学芸員課程の活動紹介、(3) 継続的なアカウントの運営により札大 OB・OG とのコンタクトを容易にする、(4) 館園実習(教育実習のように、夏休み期間を利用して博物館で実務を経験する)を行った博物館の紹介、(5) 展覧会の解説、(6) これまで異なる履修年度の学生同士の交流がなかったため、1～4 年生の履修生の相互認知を促す、である。また SNS の種類に

については、大人数でのアカウントの作りやすさと、学生の利用頻度から、Twitter を推してもらった。

学生からの SNS 開設提案から、北海道地区の大学における学芸員課程の Twitter 運営状況についても調査を行った。対象となる大学は、北海道大学、北海道教育大学、帯広畜産大学、札幌市立大学、札幌学院大学、札幌国際大学、苫小牧駒澤大学、北翔大学、北海学園大学の 9 大学である。北海道大学や札幌市立大学、札幌学院大学、北海学園大学、苫小牧駒澤大学などでは、大学単位や学部単位の SNS アカウントを有しており、そこで学芸員課程の紹介が行われていた。興味深いのは、札幌国際大学で、縄文文化に関する記事を広くツイート・リツイートして、ネットワーク作りと情報発信の拠点となっていた。また北翔大学では、芸術学科がアカウントを作成し、教職員だけでなく学生も参加して、様々なレベルの情報発信をしているのが、印象的であった。

このような北海道地区の諸大学の状況から、本学でも学芸員課程でアカウントを持ち、教職員や展示室スタッフだけでなく、資格課程の全学年の学生が投稿できるシステムにすることで、授業だけで会う人間関係から、学びの成果を吟味しあう（例えば学生企画展を実施するのは主に 3 年生であるから、すでに経験した 4 年生からのアドバイスや、次年度に経験する 2 年生にも興味を持ってもらう）人的交流や、夏の館園実習先の博物館の紹介を通して、他館との繋がりを深めたり、西岡地区の地域社会との新しい繋がりを生み出せるのではないかと期待できる。また SNS は、HP とは異なり、情報発信の頻度に特徴があるため、投稿できる人材に学生も含めれば、情報の多様性が増すだろう<sup>9</sup>。

## まとめ

SNS の利用が増大するなか、もはや情報を発信するだけでは十分な効果は得られないとも指摘されている。上述した井上透氏の研究によれば、「圧倒的な情報過多・情報洪水の中では、有用な情報が埋没しかねない。・・・

これまでのマスメディアや博物館からの一方的な情報の流れでなく、消費者である博物館ユーザーが能動的に情報・内容を創り発信するCGM (Consumer Generated Media) の影響が日々増大している<sup>10)</sup>という。例えば箱根のポーラ美術館のSNSをのぞいてみると、7月の時期は、夏休みの子供向けのオンライン鑑賞会や「#あつ森でポーラ美術館」の企画が紹介され、新しいユーザー（鑑賞者）の獲得とユーザーからの情報発信を促すアイデアが上手く取り上げられている。本学のSNSの試みの目的は、現段階では、学芸員課程の人的交流の促進と、学生企画展へのリピーターを増やすことではあるのだが、今後の課題としては、SNSを上手く活用して、将来学芸員を目指す学生に柔軟なアイデアを提供してもらい、近隣の地域住民や札幌大学をめざす高校生に学芸員課程の活動や埋蔵文化財展示室への関心を持ってもらうことである。

※この論文は、令和2（2020）年札幌大学研究助成制度による研究成果である。

## 注

- 1 例えば平成 30 年 5 月 31 日に開催された道央地区博物館等連絡協議会研修会では、北海道博物館の学芸員会田理人さんによる講演会「開拓の村施設改修・展示の更新とともに導入したインバウンド対策」が行われた。その発表によれば、平成 29 年の入村者数は、130,913 人、そのうち外国の方は 15,979 人で、全入館者のおよそ 10% が外国からの入村者であった。平成 29 年には、彼らに対する施設環境の整備として、以下のような事業が行われた。(1) 旧小川家酪農住宅および旧菊田家農家住宅の改修、内部展示改修、体験ブースの整備、(2) 案内・解説看板及びサイン等の改修、(3) wi-fi 整備、(4) スマートフォンアプリの導入による多言語化(日、英、中、韓、ロシア語の 5 カ国対応)、(5) 体験教材の整備、(6) 馬車鉄道軌道の整備、(7) 吊り橋改修、(8) 酪農牧野景観再現(旧小川家の牧棚改修)、(9) トイレの洋式化(一部)である。
- 2 学芸員とは、「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業を行う〈博物館法〉に定められた、博物館におかれる専門的職員」である(文化庁 HP より引用([https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan\\_hakubutsukan/shinko/about/](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/)))。本学では主に歴史文化専攻の学生や公務員を志望する学生の一部が履修している。
- 3 この研究の一環として、本学大学院を卒業後、現在、中国観光客向けの旅行会社を経営している李文シンさんへの聞き取り調査を行った(令和 3 年 2 月)。その際、訪日中国人観光客の多くは、北海道の食文化やウィンタースポーツに大変魅力を感じているものの、博物館施設を含めた日本文化に対しては、まだ十分に魅力を感じられていないことをご教示いただいた。このご意見から留学生に対する埋蔵文化財展示室や学芸員課程の活動の紹介が不十分と認識することができた。
- 4 ほぼ同じ開催期間ではあるが、2014 年、2016 年の展覧会は、開催日時が平日の 10 時から 16 時 30 分まで、2020 年の展覧会は、水曜日を除く平日の 9 時 30 分から 14 時 30 分であり、2020 年度の開館時間は、他の 2 展覧会より制限されている。また 2020 年度は観覧者の属性は不明で、全期間中に入館された総人数になる。
- 5 埋蔵文化財展示室スタッフによる入館者数の調査記録に基づく。
- 6 本間浩一編『ミュージアムのソーシャル・ネットワーキング』2018 年、樹村房、pp.59-82。参照。
- 7 teams を活用したオンライン上の話し合いでは、主に音声とチャットの 2 方法で対応したものの、複数の学生の意見を集約する作業には難しさを感じた。令和 3 年度全国大学博物館学講座協議会全国大会(6 月 12 日、オンライン開催)で行われた「新型コロナウイルス禍における学芸員養成課程運営のフォーラム」における明治大学、国際基督教大学、九州保健福祉大学、日本大学理工学部の学芸員課程の授業実践の報告で紹介されたオンラインホワイトボードツール「Miro」を用いれば、学生全員の作業把握が容易いように思われた。
- 8 2021 年、1 月 29 日開催された反省会では、令和 2 年の博物館実習履修生、山崎快人、小林幸太郎、越崎聖也、三塚直樹、重松美帆、畠山真希、吉田侑生、小松みのりが参加してくれた。
- 9 2021 年 4 月より「札幌大学学芸員課程」というアカウントで Twitter を開設(図 2)。
- 10 井上透「ミュージアムのインターネット/SNS に関する取り組みー博物館 ICT の現状」、本間浩一編『ミュージアムのソーシャル・ネットワーキング』2018 年、樹村房、p.82 より引用。

# 感染症、遺跡 郷土史伝える

**豊平区** 札幌大 西岡3のしでは毎年、学芸員資格の取得を目指す学生が、学内の埋蔵文化財展示室を使って展示会を開く習わしを行っています。今回は「#With 感染症・ペスト・天然痘・スペイン風邪・コロナ」と題し、2〜4月に行われました。

学芸員課程3、4年の学生8人が企画。それぞれの感染症の歴史をまとめたパネルのほか、札幌大が道内各地で行った発掘調査で出土した土器なども展示しました。道内外の博物館での実習の経験も生かした集大成です。住民が歴史に関心を持つきっかけにしたいと、小学生でも読めるように漢字には「くへる」をふり、年配の人にもやすい大きさにするなど、細部に気を配りました。

## 札幌大

感染症の歴史を解説したパネルを眺む見学者（札幌大提供）



4年生の越輪聖也さん(左)は一過去の感染症対策でも経済活動との両立を図ろうとした形跡があり、現在に通じる点もあると感じた。「札幌にはまだ発見されていない遺跡が残っている可能性が高く、感染症と人類の闘いの足跡が、身近なところに眠っているかもしれない」と、学びの成果を話します。

天然痘担当リーダーの4年生、小林平太郎さん(右)は、博物館と地域の関わりの理想像を話してくれました。「地方創生などで、地域をより大事にする機運は高まっている。地域の歴史や文化を知ると、愛着につながるはず。博物館が、住民ともにまちおこしの土台の役割を担う場になれば」

### ▲図1 北海道新聞「さっぽろ10区」

(2021年6月11日掲載)での企画展「#With 感染症」の紹介

### ◀図2 札幌大学学芸員課程のTwitter



#### 札幌大学学芸員課程

@su\_gakugei

札幌大学学芸員課程の公式アカウントです。博物館実習や埋蔵文化財展示室でのイベント、まわりの自然の様子などを紹介します。This is the official account of the curator course at Sapporo University.

◎札幌大学二号館地階

📅2021年4月からTwitterを利用しています

●フォロー中 ●フォロー

ツイート ツイートと返信 メディア いいね



札幌大学学芸員課程 @su\_gakugei · 1日 ...

今回の博物館実習の講義は、次回にわたって植物と昆虫の標本作製です。札幌大学の中にある「札大の森」へ採集へ行きました。この日は植物が主。アイヌ文化にとって重要な植物、オオウバユリや、ウド、タラの木なんかもありました。こんな豊かな森がある大学です。

どんな標本ができたかは、また後日。

